



関西学院大学 2016 年度秋季オープンセミナー  
(対人コミュニケーションの心理学)

ふだんのお考えや生活に関する調査  
調査結果のご報告  
(主要結果のまとめ)

2016 年 10 月 27 日

三浦 麻子 (文学部教授)  
稲増 一憲 (社会学部准教授)  
田渕 恵 (文学研究科博士研究員)  
村山 綾 (近畿大学国際学部講師)

## 主要な結果

- 政治が面倒なのは「投票所に足を運ぶこと」が面倒だからではない
- 「子どもや若者といった次の世代を教え導いていきたい」という気持ちは高年齢ほど強い
- 自分の行動の目標を「希望や理想」にするか「責任や義務」にするかは人により様々
- 人生で一番重要なのは「現在」

## ご回答者のあらまし

### 性別と年代

男性 123 名，女性 73 名，無回答 1 名      平均年齢 64.9 歳（標準偏差 10.52 歳）

### 結婚歴

未婚 11 名，既婚 182 名，無回答 2 名

### 子どもの人数

0 人 24 名，1 人 41 名，2 人 86 名，3 人 31 名，4 人 6 名，5 人 2 名，無回答 4 名

### 職業

会社勤務 25 名，公務員 10 名，自営業 6 名，専門職 4 名，パート・アルバイト 20 名  
無職（退職後を含む）111 名，学生 1 名，その他 13 名，無回答 1 名

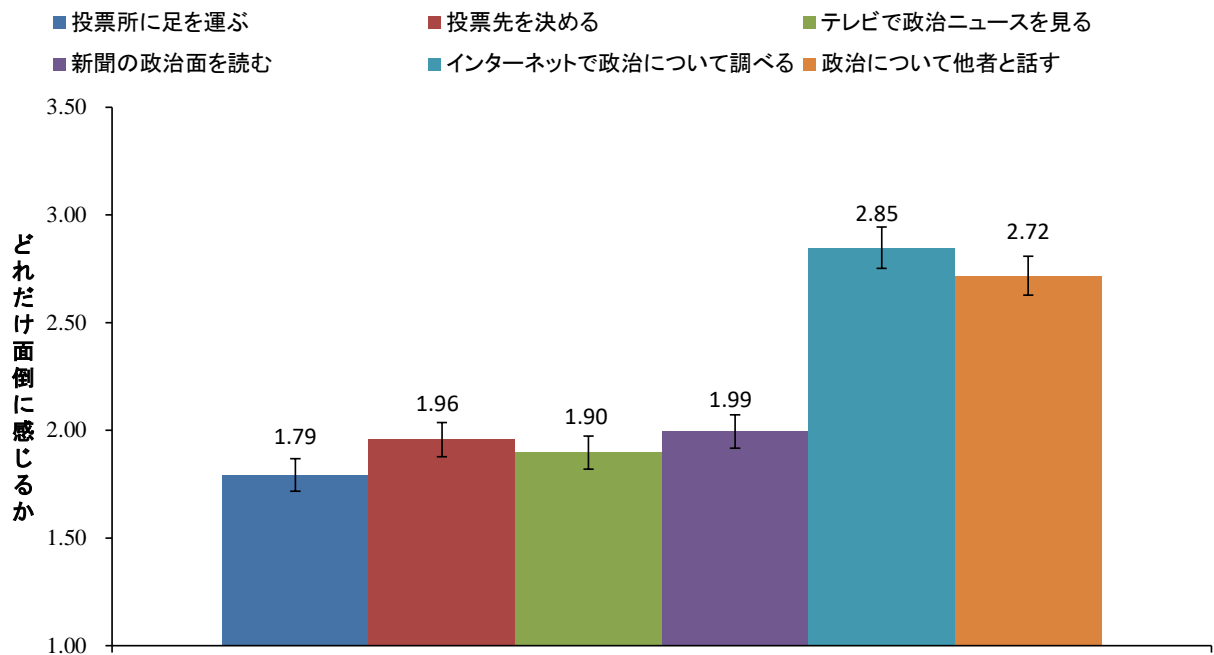
### 最終学歴

小・中学校 1 名，高校 29 名，専門学校 27 名，大学・大学院 137 名，その他 2 名

## 政治参加

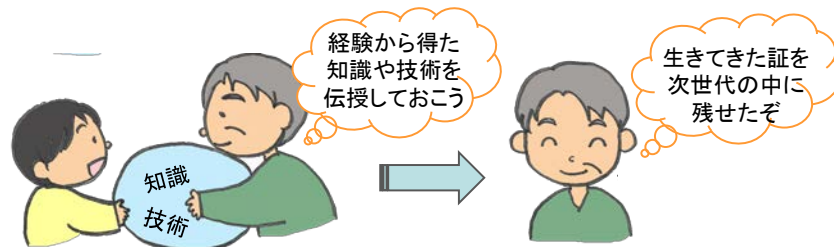
日本のような民主主義の国では、人々が投票などの機会を通じて政治に参加することが求められています。しかし、仕事や家事などの忙しい合間を縫って政治に参加するということは、そんなに簡単なことではありません。

今回みなさまに有権者と政治との関わりのうち、どの部分を面倒だと感じているかについてアンケート調査をさせていただいたところ、以下のグラフのようになりました。実は投票所に足を運ぶこと自体は、それほど面倒だと思われてはおらず、平均点は5点満点中の1.79点でした。それに比べるとインターネットで政治について調べること(2.85点)や、政治について他者と話すこと(2.72点)は、かなり面倒だと思われているようです。(稲増一憲)

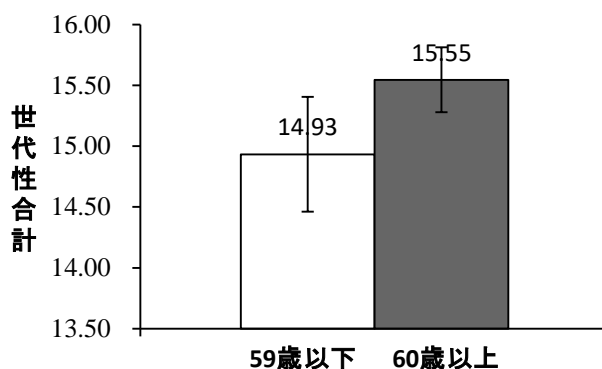


## 世代性

中高年期になると、「子どもや若者といった次の世代を教え導いていきたい」と思うころの働きが強くなってくると言われています。心理学では、こうした中高年期の次世代に対する関心を、「世代性」と呼びます。この「世代性」が高まると、若い世代を助ける行動(例:自分の持っている知識や知恵を若者に伝授する、子どもや孫の世話をする)が増えます。そうすることで、自分がこれまで生きてきた証を次の世代の中に残すことができ、人生を肯定できると言われています。



今回みなさまにアンケート調査をさせていただいたところ、まず全体の平均点は、15.34(最少得点 6,最大得点 22)となりました。年齢別で集計を行ったところ、59歳以下の方の世代性平均得点は14.93、60歳以上の方の世代性平均得点は15.55となり、これまでの研究でも報告されている通り、「世代性」は年齢とともに高まっていく傾向が認められました。



## 制御焦点

「制御焦点理論」という理論では、わたしたちの行動を決める方向性に、「促進焦点」と「予防焦点」という2種類があるとされています。「促進焦点」では、何かを達成したいという欲求を満たすために、希望や理想を目標とした行動をとります。一方、「予防焦点」では、安全でいたいという欲求を満たすために、責任や義務を目標とした行動をとります。例えば、「セミナーに参加する」という行動の背景に、「たくさんの知識を得たいから」という心の働きがある場合は「促進焦点」傾向、「参加しなければ怒られるから」という心の働きがある場合は「予防焦点」傾向となります。

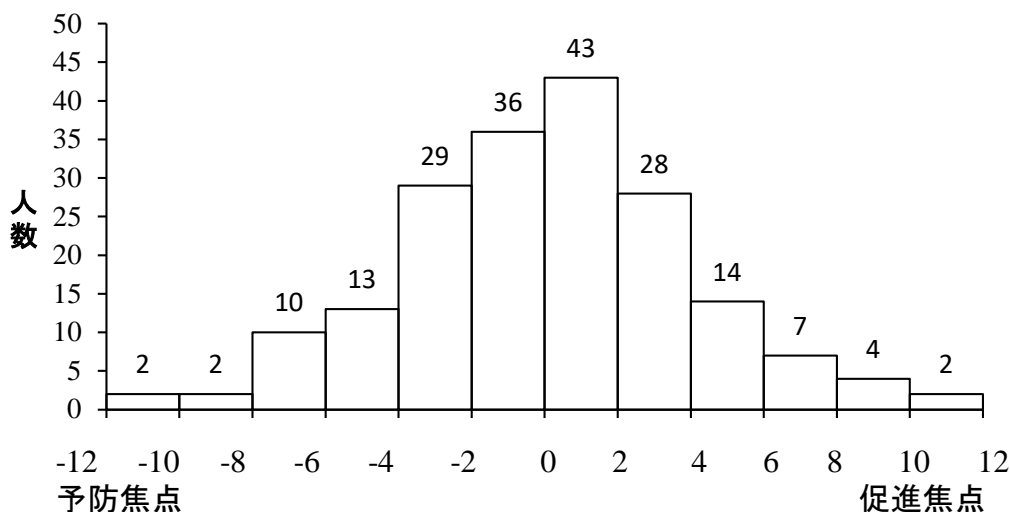


【促進焦点】  
達成欲求を満たすため  
希望や理想を目標とする



【予防焦点】  
安全欲求を満たすため  
責任や義務を目標とする

今回みなさまに、日常生活の中でみなさまがどちらの傾向が強いかについてアンケート調査をさせていただいたところ、人数のちらばりは以下のグラフのようになりました。点数が低い方が予防焦点傾向が強く、どちらの傾向も同程度の場合は得点は0点となります。やや促進焦点(以下のグラフで0-2点)の方が最も多く、43名でした。平均得点は、0.56点となりました。



(田淵恵)

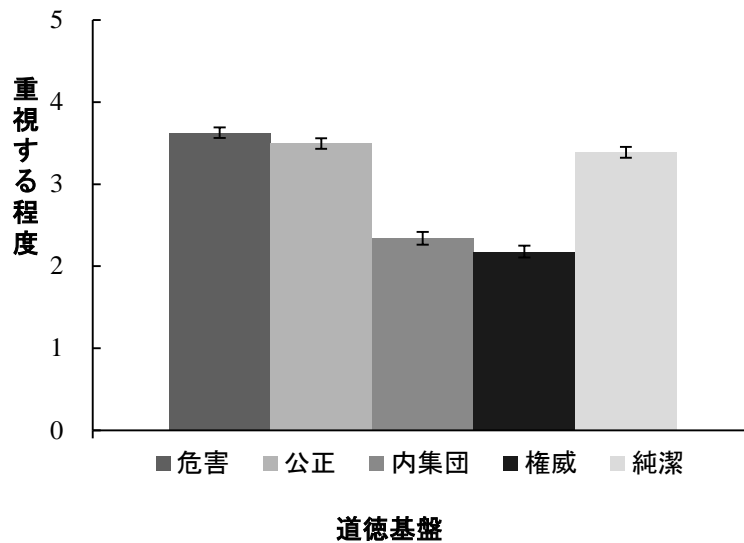
## 道徳基盤

近年の社会心理学的な研究では、人には以下の5つの道徳感情（倫理観）が備わっているとされています。そしてこれを「道徳基盤」と呼んでいます。

1. 傷つけないこと（他者に危害を加えてはいけないという考え）
2. 公正さ（不平等はよくないという考え）
3. 内集団（自分の所属する集団）への忠誠
4. 権威への敬意（上下関係などを守ろうとする）
5. 純潔さ・神聖さ（肉体的、精神的にも「きれいな／けがれていない」状態を求める）

この5つの道徳感情は、どのような文化においても存在するとされていますが、文化やジェンダー、政治的態度によって何を重視するかが異なるということもあわせて指摘されています。たとえば日本では、欧米に比べて内集団への忠誠や権威への敬意の側面が重視されるといわれています。また、女性は男性に比べて傷つけないこと、公正さ、神聖さ・純潔さを重視するようです。政治的態度がリベラルであれば、傷つけないことと公正さを、その他の側面よりも重視します。

今回アンケート調査に回答してくださった方が全体としてどの道徳的側面を重視しているのかを調べてみたところ、内集団への忠誠や権威への敬意の側面は他と比べてあまり重視しないという、これまでの報告（日本人の特徴として報告されている過去の研究結果）とは異なる結果が得られました（下図参照）。過去の研究では、回答者の平均年齢が今回よりも低かったことを考えると、年齢や世代によって、どの側面を重視するのかが異なるのかもしれない。



## 時間認識

人の時間認識（時間についてのイメージや考え）は、年齢や感情状態、信仰、文化によって異なるといわれています。年を重ねるにつれて時間がたつのを早く感じたり、恐怖を感じているときは時間がたつのが遅いと感じたりしたことはないでしょうか？

今回のアンケート調査では、(1)過去が現在にどれくらい影響するか、(2)現在が未来にどれだけ影響するか、(3)自分にとって、過去、現在、未来のうち最も重要なのはいつか、そして、(4)時間に対するイメージについてお尋ねしました。

まず、影響力に関して平均値を算出したところ、(1)は 66.31、(2)は 65.87 となり、過去→現在、現在→過去の影響力はだいたい同じ程度であると考えられていることが分かりました。また、全体の 83%の方が、自分にとって「現在」が最も重要であると回答していました。時間に対するイメージについては、「早い」「有限」「あっという間に過ぎていく」のような、時間がたつのを早く感じていると思われる記述が全体のうち 30 件と最も多くみられました。それ以外には、「大切」「貴重」「宝」のような記述も多くみられました。「流れていくもの」「流れ」といった記述もいくつかありましたが、このようなイメージはアメリカ人を対象とした調査では見られず、もしかすると日本特有の時間に対するイメージなのかもしれません。 (村山綾)

本報告書に関するご質問は三浦(asarin@kwansei.ac.jp)まで.